

## 韓国人日本語学習者の言語行動の指向性に関する一考察 : 不満表明を例に

著者	朴 承圓
雑誌名	言語科学論集
巻	5
ページ	73-84
発行年	2001-11-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/30734">http://hdl.handle.net/10097/30734</a>

# 韓国人日本語学習者の言語行動の指向性に関する一考察

## —不満表明を例に—

朴 承圓

キーワード：言語行動の指向性 言語核 非人称化ストラテジー 「から/ので」

### 要旨

「不満表明」という言語行動の中で、「言語核」の有り方、非人称化ストラテジーの使用、理由提示文における接続詞「から/ので」の使用を韓国人日本語学習者と日本語母語話者の言語行動を比較した。その結果、韓国人日本語学習者は(1)言語核を多く用い、(2)一人称「私」を多用し、(3)理由提示文の接続詞では、「ので」より「から」の使用が多い。これらの結果から韓国人日本語学習者の言語行動の指向性は、対人関係維持より目的達成指向が強いことが明らかになった。

### 1. はじめに

言語行動を行う話し手は、ふたつの指向性(熊谷 1995)を常に併せもっていると考えられる。ひとつは、当該言語行動の目的(依頼、謝罪、断り、など)を効果的に達成すること、もうひとつは、相手との対人関係を良好に保つことである。前者は、行動を起こすからには当然のことと考えられる。後者も、言語行動が対人行動であることを考えればもっともなことであるし、行動目的の達成のためにも相手の感情を損ねずにおくことは重要であろう。

本稿であげている「不満表明」という言語行動は、対立型発話内行為(Leech 1983)であり、相手を動かして特定の行動をさせるという目的が達成されなければ問題解決にならない。しかし、「不満表明」はポライトネスの議論にもしばしばとりあげられるように、相手になにかを課すことで、相手の立場を脅かす行為(Face-threatening acts: FTAs)であり、権利や自由を侵害されたくないという、Negative face を損う恐れがある(Brown & Levinson 1987)言語行動である。ちょっとした言葉の使い方、話の持ちかけ方で人間関係に大きな影響を与える可能性

のある行為であるため、話し手は不満表明を言語で行う場合、それが不当な主張や強制と映らないよう配慮が必要となる。

しかし、意味を伝えるのに不自由を感じるものが少ない中級以上の学習者でも、適切な言語行動が行えるかと問えば、問題がないわけではない。中級学習者の言語行動は、言いたいことが伝わらないという初級レベルに見られる問題とは異なる。日本語の言語運用能力に問題が少ないだけに単なる表現法の誤りとは意識されにくく、学習者の意図的な意志表出と受け取られやすい。故に、談話の円滑な進行を妨げ、日本人との間に感情的摩擦をも生じ得る。

## 2. 研究の目的と対象

### 2-1 目的

本稿の研究目的は以下の三点に分けられる。

その一、日本語学習者の言語行動を対人関係維持と目的達成という2つの言語遂行の指向性の観点から特徴を捉えようとする考え方は、珍しいものではない。言語行動における適切さを論じる際には、文法能力の適切さだけではなく、社会言語学的な適切さが問われる。ここでは、初中級から中級までの学習者の表現に着目し、言語行動の指向性を探り、学習者の現状を把握し、より円滑なコミュニケーションのための改善法を探すことを目的とする。

その二、学習者の回答から、指向性を左右すると判断される一人称「私」の使用傾向を明らかにすることによって、韓国人日本語学習者の言語行動の指向性をより深く究明したい。

その三、理由提示文における内容の比較と共に、接続詞「から/ので」の使用の面から指向性を探ることを三つ目の目的とする。

### 2-2 対象

相手に不満を表明するのに効果的な方法は、ノンバーバルな方法を含めいろいろあると思われるが、本論では言葉で表明する場合だけに着目する。

#### 2-2-1 「言語核」の有り方

「言語核」(以下「核」とする)とは、言語行動において目的達成に最も直接的に迫る部分で(熊谷 2000)、状況に対する話し手の心理状態の端的な表現である。たとえば、

\*寒くて窓を閉めて欲しい時:「寒い」

\*うるさくて静かにしてもらいたいとき:「うるさい」

の「」の部分の表現に当たる。

さらに「核」は相手に対する行動としてどのぐらいの勢いや強さ、すなわちインパクトをもち、どの位置に出現するか、ということが言語行動の指向性に関わってくると思われる。「核」の部分がどの程度直接的な働きかけかというのは、言語行動によって達成したい目的についてどこまでを口に出して言っているか、どのレベルでとめて、どのレベルで相手の反応などに委ねているか、ということである。それはいわば話し手の行動意図の前提に関することであって、積極的、消極的、率直、控えめなどと描写される特徴と密接な関係を持つと考えられる。以下に韓国人日本語学習者の表現例をあげる。

#### ＜表現例＞

0. すみませんが、試験勉強中なんで……。核無し
1. うるさいから、静かにしてください……。談話の最初
2. すみませんが、うるさいですけど、静かにしてください。談話の中間
3. あの、非常に言いにくいですが、かなりうるさいんですけど…。談話の最後

「0」は言語行動の中核的情報が何処にもない「核無し」の文で、最も緩和的で、曖昧である。「1」は、核の位置が最初である。つまり、中心が一番前に置かれていて、非常に直接的で、このような談話は指向性の面からみると、目的達成の傾向が窺えるものである。「2」は、前置きを入れた後、文の中間に「核」となる部分を入れている。前置きを入れたことによって、ポライトネス・ストラテジーを使用していることが分かる。「3」は、前置きがあって、文の終わりに核を入れ、文型も省略の型を取っているポライトネス・ストラテジーを使用している。上記の四つの例をみても分かるように、「核」の有無と出現位置は、ポライトネスの側面だけではなく、言語行動の指向性の面と大きな関わりを持っていることが分かる。

「核」の出現位置とは、言語行動の中核的情報が全体のどこに配置されているかということである。「核」の部分が冒頭に出ると、最初から問題の所在が明らかになるだけでなく、出だしにまず相手にインパクトを与えることになる。また、最後にくる場合は、下地づくりを経て結論に到達する、いわゆる順を追った展開となる。いったんポイントを出しておいてから説明に戻り、またポイントを再提示するという行きつ戻りつのパターンもある。また、上記の「0」のように直接的な働き掛けをしない場合でも、非常に間接的な言語行動になるが、文脈や状況、非言語伝達な

どの助けをかりて意図を伝えることは不可能ではない。「核」の出現位置を明らかにすることは、指向性に大いに関係あると思われる。

## 2-2-2 非人称化ストラテジー

たとえば、人に命令するということは、その人の Negative face（自由に行動したいという気持ち）を著しく脅かす行為である。したがって、普通はなんらかのポライトネス・ストラテジーが使われることになる。Brown & Levinson (1987) によると、命令におけるポライトネス・ストラテジーの一つの方法として、誰が命令しているか、また誰に命令しているかに関する情報を曖昧にする（非人称化する）ことがある。つまり登場人物の姿がはっきりとはみえないようにするのである。「私」が「あなた」に命令するのではなく、はっきりしないだれか（私ではないかもしれない）がはっきりしないだれか（あなたではないかもしれない）に命令している、ということにするわけである。

日本語の文は主語を省略してもよいとされており、普通は省略されていることが多い。そこから日本語の没主体性や非論理性が説かれたりする。

一人称の場合、ときに強い自己主張の意味を帯びて、「私がまいります」「おれが行く」という表現が使われる。この場合、他の誰でもなく、私こそ、おれこそが行くのだ、という強調の意味がはいる（三輪 2000）。

英語の場合、Kuno (1977) によれば、I, you の代わりに、不定代名詞や総称表現を使う方が緩和性が高まる。さらに無人称構文による自発的な表現を用いることにより、緩和性が高められる場合も考えられる。

1. Mary broke a wine glass.

2. Someone broke a wine glass.

3. A wine glass broke.

(Kuno 1977, p.324)

相手の face を脅かす可能性のある不満表明行為において、一人称「私」の使用は、非常に敏感に受け止められると考えられる。「私」を使うことで自己主張の強い言い方に思われがちになるからである。

不満表明の場合は、この一人称「私」の使用はポライトネスの面で大いに関係すると思われる。不満を表明することによって、相手の face を脅かすことになるので、この際、不満を感じている主体「私」を曖昧にすることは大事である。しかも、不満を表明すること自体、主体がある程度ははっきりしているので、わざわざ言う必

要もないのである。以下に一人称「私」の使用有り/無しの例をあげる。

＜表現例＞

- A. 私 が今勉強していますから、静かにしてください。
- B. 今勉強しているから、静かにしてください。

不満を表明する状況では、話し手（不満を言う側）と聞き手（不満を言われる側）二人しか存在していない。このような状況で、わざわざAのように、1人称「私」を使用し強調するより、Bのように非人称化した方が、不満表明の主体が曖昧になり、緩和性が高くなるので、ポライトネス・ストラテジーの一つとして、また対人関係維持の指向性が働いていると言える。

### 2-2-3 理由提示文の中身と接続詞「から/ので」の使用

理由提示文の形式は、聞き手と話し手の距離、聞き手に与える負担の有無、大きさなどより決められると考えられる。学習者の接続詞「から/ので」の使用は、第2言語習得の研究で大いに扱われているが、そのほとんどは、学習レベルによる習得に大きな焦点を当てており、言語行動の指向性の面を扱っている論文は見られない。

また、理由はその内容によって、聞き手の受け取り方も異なってくると思われる。

本稿では理由提示文における理由の中身と、接続詞「から/ので」の使用が言語行動の指向性とどんな関係にあるかをみた上で、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の理由の中身と接続詞「から/ので」の使用を検討し、理由提示文における学習者の問題点を明らかにするよう試みる。

## 3. 調査方法

### 3-1 データの収集方法

本調査では、日常生活で遭遇する可能性が高いと思われる二つの場面を設定し、不満をどのように表明するかを談話完成テスト (Discourse Completion Test: 以下 DCT) によって調査した。DCT による調査では不満表明を相互行為としてとらえることは難しく、実際の発話とは言えないという限界があるが、多数の被験者から効率的に資料収集するには有効であると考えられる。よってこの調査では DCT を採用した。回答は日本語母語話者（以下 JN とする）、韓国人日本語学習者（以下 KL とする）ともに日本語で書いてもらった。

### 3-2 被調査者

調査は、1998年7月から9月にかけて行った。被調査者はJN74名（男性37名、女性37名）、KL157名（男性85名、女性72名）である。KLは日本語学習歴1年以上で、日本語レベルは中級以上である。KLのうち、全体の1割程度（16名）が日本に滞在しており、他は韓国で日本語を学習している。

### 3-3 調査の概要

調査に用いたDCTの内容はJN、KLとも同じである。DCTの内容には、言語行動の「表情」を生み出す上で大きな影響を及ぼすパラ言語や非言語行動についての質問も含まれているが、今回の調査では言葉で表明された言語表現だけを分析の対象とする。

#### <場面1><学生寮にて>

夜中 3 時、あなたは試験勉強中ですが、隣の人がうるさくてなかなか集中できません。隣の人にうるさくされたのは今回が初めてです。隣の人とは、会ったら挨拶する程度で、日頃あまり付き合いはありません。

새벽 3 시,당신은 시험공부 중입니다만, 옆집 사람이 시끄럽게 하는 통에 좀처럼 집중할 수 없습니다.옆집 사람이 시끄럽게 하는 건 오늘이 처음입니다.옆집 사람과는 만나면 인사하는 정도의 사이로, 친한 사이는 아닙니다.

#### <場面2><学生寮にて>

夜中 3 時、あなたは試験勉強中ですが、隣の人がうるさくてなかなか集中できません。このようなことは以前にも何回かありました。隣の人とは、会ったら挨拶する程度で、日頃あまり付き合いはありません。

새벽 3 시,당신은 시험공부 중입니다만,옆집사람이 시끄럽게 하는통에 좀처럼 집중할 수 없습니다.옆집사람이 시끄럽게 하는건 오늘이 처음이 아니고,전에도 몇번 있었습니다.옆집사람과는 만나면 인사하는 정도의 사이로,친한 사이는 아닙니다.

不満を感じたのが初めてか否かによる言語表現の違いを見るため、上記のような二つの場面を設定した。また、不満を表明する相手は隣に住んでいる人で、不満表明後の人間関係などを考慮の上、言語行動を行わなければならない場面であることが設定上のポイントとなっている。

回答は、不満を言うときに、どのような言語表現をするかを、実際に言うときの表現で書いてもらった。

#### 4. 結果と考察

ここでは以下の三点について結果を示し考察する。

4-1では「言語核」の有り方と出現位置について、4-2では一人称「私」の使用について、4-3では理由提示文の中身と接続詞「から/ので」の使用について述べる。

##### 4-1 「言語核」の有り方と表現位置

以下の<表1>はJNとKLの「核」の使用の有無を比較したもので、<表2>は「核」使用「有」の場合、「核」をどの程度、どの位置で使用しているのかを分析した結果である。

<表1>「言語核」の有無と出現位置(%)

	言語核あり			なし	合計	(人数)
	最初	中間	最後			
場面 1						
JN	33	0	0	67	100	(13)
KL	11	21	4	64	100	(51)
合計	18	4	3	65	100	(64)
場面 2						
JN	13	4	0	83	100	(46)
KL	31	9	3	57	100	(109)
合計	25	7	2	65	100	(154)

<表1>から分かるように、場面1の場合、JNとKLの言語核の使用はそれほど差(JN33%:KL36%)はないが、出現位置から見ると、JNは談話の最初に核をおいていることが分かる。反面、KLは談話の中間に最も多く使用している。

場面2では、場面1とは使用傾向がかなり異なっており、JNの言語核の使用(17%)が著しく少なくなっていて、被験者のほとんどが言語核を使ってないことが分かる。しかし、KLの場合、場面1の36%が43%と言語核の使用が増えていて、出現位置も談話の中間から最初へと変化している。



以上のことをまとめると、JN は不満を感じた回数が一回ではない場合には言語核の使用を控えている。不満を感じたのが初めてではないため、非常に感情的になりやすいという状況であることと、一回目ではないことから、むしろ「核」となる部分の使用を避けているのだろう。しかし、KL はその反対で言語核が現れやすくなり、その表現位置も先頭にくる傾向が見られた。つまり、KL の言語行動の指向性には、人間関係維持の要素は見られず、目的達成の指向性に傾いていることが窺える。

このような KL の行動様相は特に注目すべきであり、言語行動の指導に力を注がなければならない部分の一つと考えられる。

#### 4-2 一人称「私」の使用

<表 2>は、場面 1 と 2 で、JN と KL の一人称「私」の使用率を比較したものである。

<表 2> JN、KL の一人称「私」の使用

(「私」の使用数/発話数) 単位：%

場面	JN の「私」の使用	KL の「私」の使用
場面 1	(0/13) 0%	(14/51) 27%
場面 2	(1/46) 2%	(26/109) 23%

一人称「私」の使用は、JN にはほとんどないが、KL には比較的多く見られた。KL の一人称「私」の高使用の原因として以下の四点が考えられる。

1. 日本語の言語能力が十分でないため、自分の言いたいことを必死に伝えようとする心理的要因の結果物である。
2. 言語能力よりは、自分の目的達成に言語行動の中心が置かれてしまい、目的達成につなげようとする。
3. 学習活動の影響—初級から提示されている日本語の文章は、「主語＋目的語＋述語」の順番であり、自分のことを表現する場合「私」を使用しており、「私」を使用しなくてもいいとの教育がなされていない。
4. 母語である韓国語の影響

韓国語では、「私」に当たる語の謙譲語（저/제）が存在しており、自分の意図を表現する際に和らげの機能を果す。例えば、

1. 내가 내일 시험이거든요,... (私が明日試験なんです)
2. 제가 내일 시험이거든요,... ((私の謙讓表現)が明日試験なんです)

1と2を比べると、「私」の謙讓表現に当たる2の「제」の方が、不満を表明したのにも関わらず丁寧な言い方になるのである。KLが一人称「私」を多用しているのは、恐らく謙讓語としての「私」を使用しているつもりである可能性が考えられる。

JNに「私」の使用がほとんど見られないのも特徴の一つである。この現象をBrown & Levinsonの無人称ストラテジーの一環として捉えることもできる。わざわざ「私」という一人称を使うより、無人称化し、表現の主体を曖昧にするJNの言語行動の様相が窺える。

#### 4-3 「から/ので」の理由提示文

何らかの理由を提示し、改善を要求するということ自体、話し手にも聞き手にも負担がかかるものであるが、JNとKLはどう言った理由を挙げているか、また接続詞「から/ので」の使用はどうなっているかを比較してみた。

<表3>理由文あり (単位 %) (カッコ内は人数)

	場面 1		場面 2	
JN	46.1	(13)	50.0	(46)
KL	43.1	(51)	29.4	(109)

<表4>理由文ありの中での「から」「ので」の使用率

	「から」	「ので」	合計	(人数)
場面 1				
JN	0	100	100	(13)
KL	81.8	18.2	100	(51)
場面 2				
JN	21.7	78.3	100	(23)
KL	84.3	15.7	100	(32)

まずは、JNとKLの理由の中身を見てみることにする。

JNの場合、場面1と2で多くあげられている理由の中身は「試験勉強」という個人的な理由である。KLもJNとの共通性を見せてはいるものの、KLには「うるさ

い」といった「言語核」と呼ばれるものを理由に挙げているものも少なくないところから、理由の中身が JN に比べて露骨であると思われる。

「から/ので」を比較した場合、「から」の使用は待遇上の制約があり、間違いではないが、不愉快な印象を与える可能性があると思われる。上下関係や社会的地位などの上位の聞き手に対する依頼においては、聞き手に与える負担の大小にかかわりなく、「から」の使用が避けられるのが普通であろう。

JN と KL の「から/ので」の使用は、場面 1 では JN が「から」を使用しておらず、100%「ので」を使用しているのに対し KL は「から」が 82%と、ほとんどの人が「から」を使用している。場面 2 では、JN の「から」の使用が場面 1 と比べ増えている（22%）が、やはり「ので」の使用が著しく多い。KL の場合、場面 2 でも相変わらず「ので」の使用（16%）より「から」の使用（84%）が圧倒的に多い。

以上の使用結果から分かるように、JN のほとんどは「ので」を使用しており、「から」の使用を避けていると言える。逆に KL では「ので」の使用を「から」の使用がはるかに上回っている点から、KL は「から」「ので」の使用上の制約を完全には理解していないことが窺える。

原因は、学習項目の順番にあると推測される。理由提示の接続詞の提示順はどの教科書も「から」が先であり、「ので」は後になる。また待遇性の面を提示し、「から」と「ので」の使用上の相違点を言及しても、学習者にはなかなか身につかないようである。

理由の中身自体は JN と KL で類似している（試験勉強—自分の事情）ことから、KL にとって問題点となるのは、不満の理由の内容ではなく、理由の言語形式「から/ので」選択であると言える。

## 5. まとめ

本稿では、KL の言語行動の指向性を探るため、不満表明という言語行動を一例に考察を行った。分析は表現の核となる「言語核」の有り方（表現の有無・表現位置）、非人称化ストラテジー、理由提示文における理由の中身と接続詞「から/ので」の使用を JN と比較し、指向性をみた。

その結果、表現の核となる「言語核」の有り方は、JN の場合、不満を感じた回数が複数の場合むしろ言語核の使用を避けるが、KL の場合は、JN とは反対に複数の場合が一回不満を感じた場合より言語核の使用が増え、出現位置も談話の中間から最初にくる傾向が見られた。この傾向によって、よりストレートな表現が選択さ

れていることがわかる。

非人称化ストラテジーの使用の面では、JNとKLは明らかに異なる様子を見せた。ここで注目すべき点は、KLは非人称化ストラテジーの使用が低く、一人称「私」の使用が多い。「私」を使用することによって、自己主張の強い言い方になってしまい、結果的に指向性の面でも目的達成に中心が置かれている印象を与えていることが窺える。

原因としては、言語能力の足りなさ、指向性に対する認識の足りなさ、学習活動によるもの、母語の影響などが考えられる。

理由提示文における理由の中身と接続詞「から/ので」の使用においては、JNとKLは同じく「試験勉強」という個人的な事情を理由としてあげ、改善を要求している。しかし、KLは「うるさい」を理由にしている数も多いことから、表現が露骨になっていることがわかる。また、接続詞の使用の面で、JNがほとんど「ので」を使っているのに対し、KLは「から」の使用が多かった。「から」は、その使用の面で制約があり、相手に不愉快な印象を与える可能性があると言われていることからKLの「から」の使用は注意すべき点である。よって、KLの理由提示文で問題と言えるのは、理由の中身よりは接続詞「から」の使用にあると言える。

KLの「から」から考えられるのは、学習項目の提示順による影響と、「ので」との使用上の使い分けを理解していないことで、使用における定着が遅い項目の一つではないかと思われる。

以上の三点をまとめると、不満表明を例としたKLの言語行動の指向性は、対人関係維持の努力は見られるものの、目的達成の指向性が強いと思われる。日本語のレベルが上級になるにつれて、言語行動における指向性の問題は学習者に迫ってくると考えられるため、上記のようなKLの問題点に対する指導に積極的に取り組むことが必要になってくるであろう。

## 6. 今後の課題

本稿では、指向性に関わる三つの要素について述べたが、指向性を究明するためには、言語行動を様々な角度から分析しなければならない。今後は、指向性に関わりをもつ諸要素についての研究を重ねてゆき、JNとKLの言語行動の指向性を明らかにし、指導の参考になるような研究を進めていきたいと思う。

## 参考文献

- 東照二 (1997) 『社会言語学入門-生きた言葉のおもしろさにせまる』 研究社出版
- 東真由美 (1991) 「外国人の日本語発話の日本人による評価」 萩野綱男『日本語の音声構造 2』  
筑波大学
- 宇佐美まゆみ (1998) 「ポライトネス理論の展開: ディスコース・ポライトネスという捉え方」  
『日本研究教育年報』 東京外国語大学
- エリス, R. (1996) 『第二言語習得序説-学習者言語の研究-』 研究社出版
- 柏崎秀子 (1995) 「談話レベルで捉える丁寧さ」 『日本文化研究所紀要』 第 1 号
- Kuno, S. (1977) 「英語圏における敬語」 『日本語 4 敬語』 岩波書店
- 笹川洋子 (1994) 「異文化に見られる「丁寧さのルール」の比較」 『異文化間教育 8』 異文化  
間教育学会, 44-58
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点-「行動の仕方」を形づくる諸要素について」 『日本  
語科学』 7, 95-113
- 津田早苗 (1994) 『談話分析とコミュニケーション』 リーベル出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向-日本語母語  
話者と日本語学習者の比較-」 『日本語教育』 88 号, 128-139
- 朴承圓 (2000) 「「不満表明表現」使用に関する研究-日本語母語話者と韓国人日本語学習者  
の比較」 『言語科学論集』 第 4 号 東北大学文学部
- ヴァンダーヴェーケン, D. (1995) 『発話行為理論の原理』 松柏社
- \_\_\_\_\_ (1997) 『意味と発話行為』 ひつじ書房
- 水谷修 (1996) 『話しことばと日本人』 創拓社
- 三牧陽子 (1997) 「談話における FTA 補償ストラテジー」 『大坂大学留学センター研究論集:  
異文化社会と留学生交流』 創刊号, 145-159
- 三輪正 (2000) 『人称詞と敬語-言語倫理学的考察』 人文書院
- 山梨正明 (1992) 『発話行為』 大修館書店
- Blum-Kulka, S. (1990) Interlanguage Pragmatics: The case of Requests.  
*Foreign/Second Language Pedagogy Research*. pp.225-272 Multilingual Matters, LTD.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge  
University Press.